



大石（武兵衛）家事前調査報告（参考資料）

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 5(平成18年度事業報告書):195-197

(Issue Date)

2007-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002281>



大石（武兵衛）家事前調査報告

調査日：2006年（平成18）5月24日（水）

調査地：兵庫県豊岡市但東町・大石俊彦氏邸（武兵衛家）

調査参加者（敬称略）：

《大学》木村修二（文学部地域連携研究員）

松下正和（文学部助手・歴史資料ネットワーク事務局長）

《豊岡市》金津匡伸（日本・モンゴル民族博物館館長）

《大石家》当主・大石俊彦夫妻

調査の目的：今後同家所蔵文書の調査を進めてゆくにあたり、文書群の規模などの概要を把握するための事前調査として実施。

1 調査の経過

13：00 大石邸に集合、直ちに当主・大石俊彦氏のご案内により北側内蔵内部を調査開始

14：00 調査終了

14：15 大石邸辞去

2 文書群についての所見

① 文書群の保管状況

- ・蔵2階に大部分の文書群と、1階にも保管を確認。
- ・当主・大石俊彦氏によれば1階のものは、蔵の外にあったものを移し入れた由。文書筆筭に収納されているものと、露出保管のものを確認した。床面に放置してある若干の文書も確認した。
- ・2階のものは、最後に収納されて以来、保管され続けてきたものとみられる。
- ・西面壁に棚を2段しつらえており、そこにまとまった数の帳面類が横積で露出保管されていた。棚の下方に長持があり蓋上に10点ほど帳面類が置かれていた。上の棚の奥（西北側）に明治期調製の明記がなされた小型行李が3つありそれぞれ文書が満載状態で収納。
- ・蔵内中央部に長持が2棹置かれているがその蓋上に木箱が4点あり。うち1つには絵図を含む相当量の文書が収納。別の木箱の上に数点の帳面が放置されていた（西面棚の帳面を降ろしたまま放置したものか）。
- ・蔵北面壁に沿って長持、筆筭が並置。長持には布団類が収納されていたが、その蓋上に紐に括られた一紙文書束あり。筆筭は5～6段のものが3棹あり、いずれも文書がほぼ満載状態で収納（空の棚もあり）。
- ・蔵東面にも棚2段設置。棚には食器類を収納した木箱がいくつか保管されているが、1つだけ文書が収納されている木箱を確認。
- ・南面にも棚が2段設置されているが、文書が収納された箱はなかったものの、1点だけ露出放置されていた。また文書ではないが、書籍を収納した木箱があった
- ・蔵内梁を差し渡し形で棚が設えられており、南寄り北寄りの2箇所に分けてかなり大量の文書の塊が露出保管されていた（一紙物中心か）。また北寄り棚には中型行李があり中を確認すると近世の横帳が満載されていた。
- ・また書画の軸を確認したが、一部は箱のみのものもあり（当主によれば20年以上前に盗難に遭った由）。残る軸は、歴代当主のものと思われる肖像画と見られる（幕末の絵師・日根対山筆のものを含む）。
- ・蔵内1階には、水害後母屋より搬入された襖が10数枚あった。

② 文書群の内容

上記に確認した文書群の全てについて、現状記録の必要から詳しい内容を確認するに至っていないが、露出面や若干開披確認したところでは、帳面類は「散田帳」や「大福帳」などの家政関係史料が大部分を占めると見られた。「散田帳」は大石家が所有していた土地を集積した帳面で、毎年の収穫高や年貢

高などを記録しているとみられ、地主としての大石家を分析するうえでの基本史料となるはずである。なお参考までに、約50年前に調査されている近所の大石藤兵衛家についても同様に「散田帳」や「大福帳」などが確認されている（天野元之助・梅溪昇『（京都大学人文科学研究所調査報告第2号）但馬における大土地所有の形成と変遷（Ⅰ）（Ⅱ）—兵庫県出石郡合橋村矢根大石家の場合—』（京都大学人文科学研究所、1952年））。大石武兵衛家所蔵のものは、明治以降昭和初期のものが多く確認できたが、近世のものも存在する可能性はある。

矢根村の村政に関わるものは、今回の事前調査では確認できなかったが、歴代当主の中で同村庄屋に就いた人物もいることから、今後見出される可能性はあるが、基本的には家政に関わる文書で占められているとみてよさそうである。本文書群の分析を地域との関わりの中で進めるためにも村政に関する史料が今後必要になると思われるが、かつて庄屋・年寄・戸長など村役を経験した旧家や公民館等に区有文書として所在していないか、当家以外、矢根地区内の悉皆的調査が実現することが望まれる。

いずれにしても今後の展開にまちたい。

③ 文書群の規模

これも詳細については今後にまっほかないが、現時点では5000点以上の規模があるとみられ、一紙文書の存在状況によってはさらに点数が増える可能性がある。また今回確認できなかった南隣の蔵に文書が所在しないか確認の要はあるが、当主によれば無いはずだとのこと。

なお、今回確認した内蔵2階の中央に置かれている長持に古新聞が被せられていたが、以前神大工学部足立研究室による調査の際、古新聞に入り混じっていた同家屋敷の家相図が確認され、同研究室によって現在まで持ち出されたままとなっている。また今回調査できなかった隣の内蔵にも若干の建築関係の資料が確認された由で、やはり同研究室によって持ち出されているとのことである。文書群全体の現状記録をとる必要からも、できるだけ早急に原状に戻されることと、今後は不用意な持ち出しをなされないことを同研究室には求めたい（文書調査者の恣意による「持ち出し」行為の弊害については、網野善彦『古文書返却の旅—戦後史学史の一齣—』（中公新書、1999年）第9章を参照のこと）。

3 今後の調査について

本文書群の調査は、一部攪乱されたあとは見られるものの、基本的にかつての当主によって最後に整理保管されて以来の状況が良好に保存されていると考えられるうえ、当時かなり意識的に整理したと見られるため、まず詳細な現状記録をとる必要があると考える。したがってこれ以上の攪乱は絶対避けるべきである（抜き取り・持ち出しは論外）。水害後、現当主によって蔵に運びこまれた文書群もある模様なので、当主への聞き取りを密にして、調査を進める必要がある。

但し、蔵の戸の開披には当主により防犯設備の解除が必要となるが、現当主が神戸市内に在住されていることもあり、現地における調査は、当主の負担を出来るだけ軽減するためにも短期的に且つ集約的に実施する必要がある。つまり一回の調査では、1日～数日程度をかけて集中的に行ない、年間に多くても2～3回程度に留めざるをえないのではないかと考える。もとより現状記録が完了すれば、整理対象の文書だけをたとえば日本・モンゴル民族博物館等へ借用・別置し、調査・整理完了後大石邸へ戻すという形で進めることは可能であろう。その点は今後の状況をみて臨機応変に考えたい。

現状記録が完了したあとの整理作業をどのように進めるかも、今後検討を要するが、専門技術を要することから文書整理経験のないようなボランティアによる作業というのはほんらい泥まないだろう。たとえば、大石武兵衛家文書研究会という形をとって、本調査の趣旨・方針を充分説明した上で関西やその他の地域から史料整理の経験のある専門研究者を募り、合宿を行ない短期集中的に調査を実施する方法（日本福祉大学知多半島総合研究所と常滑市との連携調査の例）や、1～2名を長期間雇用して整理作業に専任させる方法などが考えられる。これらも関係者が協議のうえ決定する必要があるだろう。

最後に一言付け加えておきたい。当家は、1924年（大正13）当時のデータで、出石郡で2番目、但馬地区全体でも11番目にランクされるほどの大土地所有者であるにもかかわらず、過去に所蔵史料の本格的調査はもとより部分的な調査すらも実施されることがない極めて稀有な例である。当主ご夫妻からは、同文書群の調査・研究については全面的にご協力いただけるとのご快諾を賜っている。こうしたご好意には、関係者一同積極的にお答えする責務がすでに生じているものと考えている。関係者の連携を密にしつつ、今後慎重かつ円滑に調査が進められることを望むものである。

（文責：神戸大学文学部地域連携センター研究員・木村修二）